FUJIYOSHIDA MUSEUM
OF LOCAL HISTORY NEWS

MARUBI

富士吉田市歴史民俗博物館だより

14

2000.3.31

富士吉田
あれこれ

吉田の豆炒り祝言

当地にのみ特徴的にみられることではないのですが、他地域と比較して派手だといわれる吉田の結婚式についてふれてみます。

結婚式と一口にいっても神式・仏式・キリスト教式など様々ありますが、式そのものはそれぞれの作法に則って執り行われるわけで、全国的にみてもそれほど違いはないものと考えられます。差異がみられるのは披露宴の形態にあるといえます。都市部においては、招待者の人数はおよそ100名前後が一般的でしょう。吉田ではこの披露宴の規模がとても大きくなり、招待者数が200人くらいから、多くなると400人を越えるほどになります。つまり、派手ということは、招待者の人数が多いということです。しかし実際のところ、大規模な披露宴はここだけに特徴的にみられることではなく、大都市郊外においてどこにでもみられる光景であり、珍しいことではありません。

このような披露宴の形態は決して古いものではなく、むしろ戦後に発展していったものと考えられます。かつては家で執り行った式やそれに続く披露目が、準備が大変なのと多人数を呼びきれないことを背景として、次第に規模の大きな式場へと移行していき、式と披露宴が分離した形式になっていったものと考えられます。

現在ではこのようになっている吉田の結婚式ですが、大正初期から昭和10年代くらいの上吉田では「吉田の豆炒り祝言」といって極めて簡略なものでした。塩炒りした大豆をオテノクボ（手のひらの窪）でお茶請にして茶を振る舞って披露の場としました。また、忙しい時期を避けて農閑期にかけて行われることが多かったようです。

今と昔では先のような違いがみられますが、家や人とのつながりという面では、その根底にあるものは変りはないでしょう。しかし現代ではそれに加えて様々な事柄が付加されているようです。その背景の一つには、吉田の町そのものが外部からの人の流入によってではなく、血縁につながるものが膨らんで形成された地域社会だということです。それは織物という経済基盤のなかでは、生産の場となる耕地を分与しなくてもよいことなどが要因として考えられます。このようなことから旧来からの人間の結び付きが強く残ってきたのだといえましょう。そういった結合が様々な関係にまで派生し、今にひきつがれているのと、今日的な新しい関係も加わり、「呼ばれれば呼びかえす」などの義理の観念として残ってきたとも考えられます。

若い世代では「そんなに大きくしなくても」と感じているようですが、家の様々な付き合いにどうしても比重が傾いてしまうようです。

これが現代の吉田にみられる結婚式のあり方なのではないでしょうか。

▼博物館レポート

『富士山道しるべ』を歩く（後）

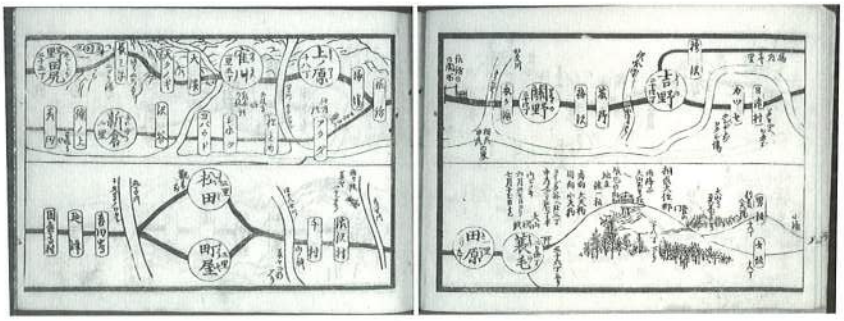
はじめに

前回は内藤新宿(東京都新宿区)から与瀬(神奈川県相模湖町)までの富士道について紹介したので、今回は吉野(同藤野町)を起点として山もとの吉田(富士吉田市)への道程を後編として掲げることにします。

吉野、関野を過ぎると、そこはもう甲斐国となります。

なお、今回も文中で紹介する写真は、前編と同様に富士吉田市企画課の平成11年度「富士道あんぎゃ」の折に撮影されたものを使用しました。

吉野～野田尻



吉野～野田尻／『富士山道しるべ』

吉 野

次の関野との間は二十四丁である。吉野からは沢合川（沢井川）に架かる小さるはし（小猿橋）をわたり、藤野、梅沢をへて関野に着く。

吉野は、中央線藤野駅のある地区であり、その駅前で休憩したい。駅前広場で飲み水を確保することやトイレを使うことができる。

関 野

関野から上ノ原（上野原）までの道程は三十四丁ある。ここからさらに、衣が滝から「甲州相州の界」のさかいばし（界橋）へと向かう。

国道を往き、神奈川中央交通の名倉バス停のところで左折して境川（界川）の谷へ下る。境沢橋が山梨県と神奈川県との県境になっている。橋詰は休憩によい場所である。

【吉野付近】

【名倉で旧道へ分岐】

【相模湖IC付近の甲州街道】

【相模と甲斐の境界にかかる境沢橋】

▼博物館レポート～「富士山道しるべ」を歩く（後）

上ノ原

甲斐と相模の国境のサカイ川に架かる界橋を渡る。諏訪の御関所を通り、諏訪、塚場から、上ノ原へ出る。上ノ原の先は尾根道となり、次の鶴川までは十八丁である。

甲州街道とは別に川沿いの脇道もある。諏訪で分岐し、アラクラ（新倉）へ二里の道である。

境沢橋を渡り上野原台地先端部の急坂を上りあげると、上野原の町へ入っていくことになる。諏訪番所跡を過ぎ、自動車教習所までくると道は平坦になる。諏訪のはずれには古郡神社（諏訪神社）が祀られる。その先の小坂をのぼり、塚場へと向かう。赤い鳥居の神社の傍らには地名の由来ともなっている塚、かつての一里塚が残っている。町の中心部に入って、国道20号と合流する。ここからは交通量の多い道である。まっすぐに進んで、五日市・小菅方面へ行く県道との分岐点で歩道橋をわたり、そのまま薬局西側の旧道へと入る。この道が旧来の甲州街道である。町外れで道が二股に分かれる。本来の道は左手の道であるが、途中で途切れてしまうため、右側に道を取ることにする。国道20号の歩道橋をわたり、鶴川へと下りていく。車道は大きくヘアピンカーブを描いて鶴川橋まで下りていくが、歩道は途中で直接鶴川橋へ下れるように取り付けられている。

【上野原町民会館での昼食】

鶴川

上ノ原からつる川（鶴川）をカチワタシ（徒歩渡し）でわたると鶴川宿で、次の野田尻まで二十五丁である。鶴川の先でまた川をわたり、大濱、大クノギ（大椚）と過ぎる。大クノギからは、「此間山道あり」を進み、長ミ子（長峰）にいたる。付近にはニゴリ池（濁池・長峰の池）があり、さらに行くと野田尻宿に着く。

現在は橋をわったって鶴川宿に着く。宿の反対側まで進み、その背後の山に登り上げるようにして鶴川右岸の台地の上に出ると、そこが大椚である。集落の南側は工業団地が造成されて旧観が大きく変わっている。また、この付近には、中央道が通っていて、旧甲州街道は随所で道が寸断されている。長峰の池は、中央道に取り込まれており、残っていない。この先の野田尻までは中央道の側道を行くしかない。

野田尻

野田尻から二十五丁で次の宿場の犬目となる。矢坪、ザトウコロガシ（座頭転がし）、新出（新田）、犬目にいたる。新出には丹勢大ゴンゲンがある。

野田尻からは、しばらく中央道と並行して北側を行き、西光寺の前で中央道のガードを潜り、

【西光寺前を通過】

平和中学校の南側の県道を辿って行くことになる。平和中学校先の道の傍らには、この地域の人たちによって構成されていた富士講「山嶽講」の石造物が立てられている。山嶽講は上野原町、丹波山・小菅両村の範囲で講としてのまとまりをもっていた。

矢坪の手前で、また中央道の高架橋をわたり、

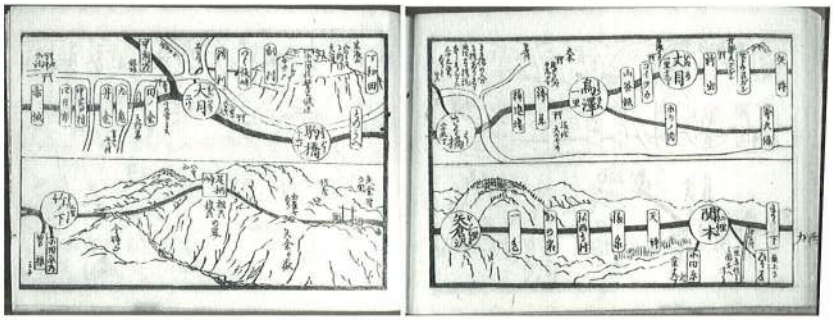
【山嶽講の石造物前を通過】

▼博物館レポート～「富士山道しるべ」を歩く（後）

犬目～大月

矢坪の集落に入っていく。集落を過ぎて、甲州街道は犬目峠への山越えの道なる。沢をえぐった巻き道の先が座頭転がしと呼ばれる崖上の道である。この部分は、江戸時代以来の甲州街道を完全な形で残している部分であり、山の稜線を越える付近が犬目峠と推定される。浮世絵に描かれた「甲州犬目峠」はここを指す。この峠ではじめて富士山を西の空に仰ぐことができる。

【中央道に架かる矢坪橋】



犬目～大月

犬 目

犬目宿の手前には、白滝フトウ（不動）が祀られ、同宿を過ぎて、コイツカ（恋塚）、山谷坂を下って鳥沢に向かう。

恋塚の先の大山神社前で、道を右に取ると恋塚集落に入って行く。ここは犬目宿の馬宿と伝えられ、古い家並みが続いている。その先の山谷は鳥沢宿の立場だったところである。

諏訪から上ノ原に向かわずに、桂川沿いを行く間道がある。諏訪から「アラダ（新田）へ二里」を歩き、その先でつる川を渡る。松とめ（松留）、シホツ（四方津）、ヨバウド、沢谷、新倉が宿となり、新倉から二里で鳥澤宿となる。綱ノ上、彦田、斧久保、ホリノ内（堀之内）、鳥澤へと辿る川辺の脇道である。

恋塚は甲州街道の一里塚で、現在も旧観をよくとどめている。その付近には、部分的に、旧道の石畳が残っている。

これまでは桂川と仲間川の間の尾根を道を辿ってきたのであるが、ここからは桂川沿いの谷に向って、だらだら下りの道となる。途中、山谷を経て鳥沢に下っていく。

鳥 澤

鳥澤から袴着を過ぎ、小向の古い家並みの間を通って精進場へ下りる。そこから直線的に登りあげ、さる橋（猿橋）へ向かう。この間一里である。大木（扇）の明神祠には、「足アラハズの木アリ」、一方、福地の祠（福地八幡社）には、大ケヤキが記される。精進場を過ぎ、ワタ川（和田川）と合流した川（桂川）に架かる橋を渡る。

鳥澤から袴着をへて、桂川の精進場に下りる。小向の入口で右手の旧道に折れて、国道の北側を並行して進むと、その先で自動車は行き止まりとなる。街道は家と家の間の九十九折の細道となって桂川に向かって南下し、国道を横切って桂川の川岸に出る。

【小向付近の甲州街道】

▼博物館レポート～「富士山道しるべ」を歩く（後）

【精進場での説明】

現在、下降地点は、国道20号の側道の石垣が積まれているため、反対側の上り口まで行って、そこを往復することになる。精進場には富士講の石造物が二基存在する。再び国道まで登り上げて、西方に進む。

猿 橋

猿橋と次の駒橋との両宿間は二十五丁である。橋の説明として、「さる橋の入口に橋あり、長さ廿四間橋杭なし、水ぎハ迄十三ひろありといふ」と記し、そこから下和田への間道が示されている。下和田、畑村（畑倉）、つく坂峠、浅利でアサリ川（浅利川）をこえて大月宿にいたる道筋である。とのうへ（殿上）をへて、駒橋へ向かう。

猿橋の袂は公園に整備されている。国指定名勝の猿橋をわたり、橋詰の公園で休憩したい。そこから再び国道20号に出る。国道の歩道を歩いて、次の殿上にいたる。殿上の西端

【猿橋に到着】

部で道は直角に曲がり、そのまま中央線を越える跨線橋となっている。曲がってすぐに左側の土手下に下りる旧道があるので、その道を行くと駒橋の宿につくことになる。途中、厄王さんの名で親しまれる厄王神社を過ぎていく。

駒 橋

駒橋と大月の間は十六丁である。川（桂川）の対岸には、岩殿山があり、「山のうらに新宮道、小山田信繁公城跡、井戸」がある。

駒橋宿の途中で国道20号と重なる。ここからまた交通量の多い国道を行くことになる。桂川の対岸には、岩殿山がそびえ、その麓には中央道が走っている。中央線に沿って歩いていく。

大 月

大月宿には三島（三島神社）大ケヤ木がある。ここから甲府道と分岐して、吉田への道を取る。大月から次の宿である谷村までは二リ（里）で、田ノ倉（田野倉）、九鬼、井倉、中嶌村、四日市（四日市場）、赤坂、谷村と辿る。田ノ倉の入口には、「千の宮と云」三島明神が、その先には返塚石碑、天狗岩がある。九鬼では川（朝日川）を渡り、そこに「セキアリ、五ヶ村」（五ヶ村堰）がある。井倉を過ぎて、また川（菅野川）を橋で渡る。四日市には生出明神の社が祀られる。

高月橋入口の手前で、また旧道に折れる。立体交差で高月橋の下を潜り、宿の中心にはいってく。三島神社には、大月の地名のもとになった大ケヤキを記念する「大槻」の石碑があり、五月通りと名付けられた道を大月駅方向に歩いていく。

大月駅を過ぎて、かつての宿尻にあたる現在の大月橋東詰には、富士講中の立てた石造物群がある。これらは富士道・富士山道の道標を兼ねている。道を富士山方向へ取る。

【甲州街道と富士道の分岐】

朝日川に架かる落合橋の手前で、左側にある河原へ下りる道を下りていく。近代化遺産に登録された落合送水橋の下を潜り、朝日川の河原

▼博物館レポート～「富士山道しるべ」を歩く（後）

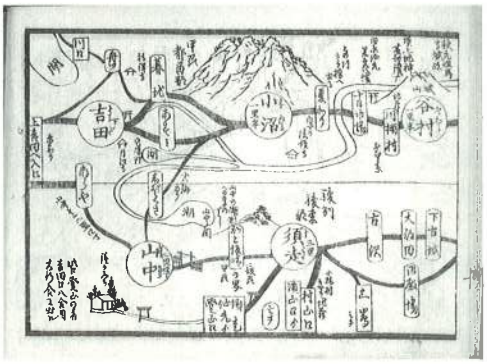
へ出る。河原の草原の中を進み、丸太の仮橋を渡り、対岸に渡る。そこから田んぼの石垣に沿って、石垣が終わるところに付けられた階段を戻るように登り、河原から一段上の田んぼの畦道を廻って舗装された道に出る。川沿いに南進し、井倉へ向かう。県道四日市場上野原線を渡り、川沿いの道を進む。

宮川上橋を渡る。橋の袂には六字名号塔があり、その台座に「右富士道」の文字が刻まれている。中島で国道139号と合流し、四日市場で再び大堰沿いに左に折れる。赤坂を越え、谷村東側の山裾の小道を深田をへて、田町方向に出る。

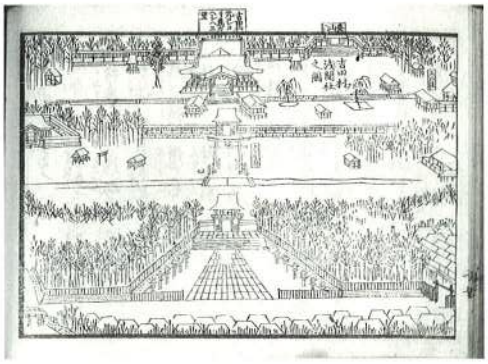
【落合の仮橋】

【赤坂付近の旧道】

谷村～吉田



谷村～吉田



浅間神社

谷 村

谷村は富士山道の宿場となっていた。秋元但馬守城跡の城山があり、頂上地神 藤切護摩が祀られる。谷村から川棚村、十日市場を過ぎ、「このさる橋へ出る」と注記される川を橋で渡り、夏かり（夏狩）をへて小沼に至る。この間一里半の距離である。十日市場の田原滝元に若宮八幡が祀られる。夏かりには内マリ法経寺がある。

都留市の中心である谷村は秋元氏の城下町でもあった。旧城下の家中川に沿って南進する。城南公園で休憩するとよい。城南公園から上町へ出て、普門寺参道へと右折する。旧道をしばらく行って、滝下で国道と一緒になる。田原ノ滝付近で、桂川は旧佐伯橋を渡り、十日市場を過ぎて夏狩への旧道に曲がる。下夏狩、上夏狩と通り抜ける。団子坂には富士道の道標が残っている。その先の確実な道は、湯ノ沢へ行く道にぶつかって、そのT字路を左折していったん国道に出て、小沼へ向かうルートである。

小 沼

小沼から下吉田へは道が二つに分かれる。一つは暮地（上暮地）を行く道で、他方はあすミ(明見）回りの道である。小沼から下吉田まで一里半。暮地に福禅寺（福善寺）があり、舟ツ(船津)、川口(河口)と湖に通じている。あすミには、湖（明見湖）と竜神祠が、その先の下吉田には月江寺と社（浅間神社）がある。あすミの

▼博物館レポート～「富士山道しるべ」を歩く（後）

手前でしぼくさ（忍草）の小八海への道を分ける。

【小沼付近の富士道】

暮地の道は、小沼追分から小坂を登り、新屋（寿町）の旧道から尾垂山と尾垂丸尾の際を下の水の大神宮に向かっていく道である。下新田（富士見町）の宿通りを通って下宮に出る。明見回りの道は、取入から明見橋を渡り、古屋、小原、明見湖に出て、さらに下吉田に向かう道である。現在は、明見湖から下吉田までの具体的なルートは不明である。

【桂川淵を往く富士道】

吉田

道は下吉田から「上吉田へ入口」となり、ここで大山石尊へ廻る道路と結節している。

現在の本町通りは、かつての富士山道と重なる道である。商店街となっている通りを上吉田へと上って行き、金鳥居をくぐって「吉田」へと到着するのである。

金鳥居を基点として、登山道は北口本宮冨士浅間神社から山頂へと延びている。「富士道あんぎゃ」では、浅間神社を第一段階の到達点とした。

【金鳥居に到着】

【浅間神社での万歳】

おわりに

以上『富士山道しるべ』の内容にそって、江戸・東京日本橋から延々三十六里/144kmにおよぶ富士山道を上・下編2回に分けて紹介してきました。現代人の足でも、おそらくここまでの道を踏破することはたやすいことではないと思われます。しかしながら、個人でもこの旧来の道筋を辿って御山参詣・富士登山を遂げようとする人があれば、この「マルビ」をガイドブック代わりに利用してください。それは望外の喜びです。また、甲州街道や谷村路を合わせての「富士山道」に関わる史資料や古い写真など、何でも当館までお寄せいただければ幸いです。

＜学芸員　堀内　真＞

【「富士道あんぎゃ」完歩証の交付】

▼活動報告

企画展・博物館講座

企画展

●企画展『馬返しの今昔』

平成12年1月20日(木)～3月15日(水)

富士山は神の山として古来より人々の信仰をあつめてきました。「馬返し」はその名のごとく馬を返す場所のことで、富士山へ登拝する人々にとっては馬に乗って通行できる最終地点でもありました。それは「馬返し」から先が神聖な神の領域となるためで、俗世界と神の聖域との境界を示す場所でもありました。

今回の企画展では、「馬返し」という場所に焦点をあて、富士登拝の信仰施設として成立していった昔から整備事業の進む今に至るまでの歴史を紹介しました。

博物館講座

●歴史散歩『市内明見の歴史と文化』

平成11年10月17日(日)

明見地区は、市域の中にあって古くから人々の生活の場となっていた古屋敷遺跡などの縄文時代早期の遺跡に始まり、中世の寺院や近世の溶岩台地開発に伴う町並みなど、多くの史跡が残されています。

当日は天候にも恵まれ、参加者は、自分たちの身近にある素晴らしい文化遺産を再発見できたようでした。

【慈光院】

●体験学習『縄文式魚釣り』

平成11年10月31日(日)

縄文時代の遺跡から出土している釣針(骨角器)を参考に、骨で釣針を作り、実際に魚釣りにチャレンジしてみました。

参加者は、最初このような仕掛けでの釣りに半信半疑でしたが、実際に魚を釣り上げてみて、改めて縄文人の知恵と技術に感心していました。

【釣りに挑戦】

タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地一帯を指すこの地方のことば「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化（変化）したものといわれています。

ご案内

開館時間 午前9:30～午後5:00（入館は午後4:30まで）

休館日 月曜日（祝日を除く）
祝日の翌日（日曜・祝日を除く）
12月28日～翌1月3日

観覧料

大　人	300円（240円）
小中高生	150円（120円）

（　）内は20名以上の団体料金

交通案内
●中央自動車道河口湖ICより車で10分。
●富士急行線富士吉田駅より山中湖方面バス15分、サンパークふじ下車。

富士吉田市歴史民俗博物館
FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

〒403-0005　山梨県富士吉田市上吉田 2288-1
TEL 0555-24-2411 FAX 0555-24-4665
2288-1 KAMIYOSHIDA,FUJIYOSIDA-SHI,YAMANASHI-KEN 〒 403-0005
博物館 ホームページ　URL　http://www.mfi.or.jp/marubi/
E-mail　marubi@mfi.or.jp

発行　平成12年3月31日

印刷　（株）シノハラA&P　Creator／ジャム